

透徹した洞察力と高邁なる識見

簡明直截な文章で記す、革命家の哀歓と真実

維新志士日記の白眉！

日本史籍協會編

木戸孝允日記

全三卷

普及版 限定二百部復刻



マツノ書店

同廿三日 晴山縣狂介熊野一郎等來着皆此度の變を聞長歎せり余等の論

と無相違河野龜太郎余を尋ね浪華より來れり三條卿と野村藤井への書

狀を認め杉に託せり愚意の件々々々又杉に論し置けり河村大丞來訪杉

四字過乘艦今朝安場逸平大田黒岩太來訪鳥尾小彌太亦山縣一同來着尋

問せり

同廿四日 天氣穩諸子之促に隨ひ宮本三好河野等と蒸氣船にて上坂山縣

も同船なり船中にて馬渡に逢ふ神戸揚碇十字浪華着十二字也于時兵隊

已に揚陸所を護衛傳信機之妙尤相顯る常安邸に至て泊す山田松本佐々

木其他客來甚多し松本佐々木は余を尋ね神戸來るの意にて山田書狀を

持來れり

(龜頭)

山縣も來訪山田へ近情を語り只天下の一定たる基本確立有志分派の
姿に至らざるを祈る

今日青木周藏寺より書狀を送れり

本戸孝九日記第一 (明治四年正月)

四百四十七

本戸孝九日記第一 (明治四年正月)

四百四十八

同廿五日 晴吉井源馬來訪大久保西郷來話余亦心事を縷述不覺涕泣塞胸

言口より不得出先年來の時勢千苦萬辛而して世人不振百事之不與官員

中二十年間の時勢を無事平安に消過し今日僥倖を以

朝廷上に奔走するもの不少實に酸辛之地を不知依要を失する事多々長

歎に堪へざる也安場大田黒等も亦來話出兵之御沙汰あり依て暫相滯大

久保余等に面會すと云二氏之議論益切實なり二氏に神戸に逢ふ已に杉

等と東行の筈也出兵云々にて俄相殘れり

(龜頭)

今夕大久保西郷を訪ふ兵隊之護來るを厭ひ兵隊に不告して出子時遂
に西郷へ尋來れり

同廿六日 曇客來如山松田京都大參事も態と下坂來訪せり暫時事を談す

松田は十年前の知己なり山縣山田三好等會合獻兵の情實爾他將來之目

的等を論し未萌に着手の件々を謀る河内宗一郎會津人日下一郎を同伴

せり日下は曾て余に身上を託す依て吉井等へ謀り置今日吉井へ添書せ



これと同じ写真の裏面に「明治四年四月撮影」とあり、『本戸孝九日記』の四月三日に「晴十二字木梨龍二氏と寺町写真に至る」と記されたのがこの写真ではとされている。

■本書は数ある「日本史籍協会叢書」の中でも

栄えある第一回配本に選ばれ、昭和七年に上梓

されるや版を重ね、維新史関係書の中でも抜群

に需要の多い本として、よく知られています。

■このパンフでもよくお分かりの通り、文句なく

充実した内容なので自信満々お薦め致します。

■小社では本書を十九年前に復刻しましたが、

やがて古書市場でも品不足となり、五万円以上

になったこともあります。

今回は早めにご予約下さい。

■体裁

A5判並製共函入・一五七八頁

■予約特価 二万円 (税・送料別)

■定価 二万四千元 (税・送料別)

■特価締切 27年6月10日 (厳守)

■発売 27年7月上旬予定

限定二百部復刻

▼書店不卸 ▼縮切厳守 ▼返本OK

●セット特価をご利用下さい。

山口県周南市銀座2-13

マツノ書店

URL: <http://www.matsuno.com>

來て今日決答の趣を語れり○昨日知事公より紙と勝輻子を贈れり
 同廿一日 晴九字頃高知を發す城下より舟にて湊に至る板垣余の寓に來
 る途中にて相逢彼は馬より下て在橋上余は在舟中浪華に相會するを約
 して去浦戸に出るの間江上の風光尤佳天氣も亦晴朗十一字前雲揚艦に
 乗る無間大久保西郷等も亦來る藩廳より鷄卵數百を贈る五字頃
 を過今日風波雖穩此處に至て艦の動搖尤甚東北風亦吹來て烈八字頃
 より風穩五字頃由良に至る

同廿二日 曇七字前より微雨十時前神戸に着す上陸所へ長門屋より廣澤
 之逢難事を告げり余等驚愕悲憤暫絶言語せり長門屋にて大久保西郷等
 に逢ひ去て布引へ一同至る榎村の書狀到來大略廣澤の變の始末を誌せ
 り廣澤去冬余に一書を送る奮勵大に時勢を歎し今日之事任する甚厚し
 余又其書を筒中に出し永訣を思數讀不堪流涕慘澹也
 王政一新之際只廣澤の一人政府上に余を助くるものあり今日の事を聽

木戸孝九日記第一 (明治四年正月)

四百四十五

實に兄弟の難に逢ふと雖如此の悼悟如何と思ふ河村兵部大丞中山神戸
 知事其他來客頻々小川彦右衛門も亦書狀を河村宗一も亦余を尋て來る
 朝廷上前途之事は元より私情におゐても片時も不忍ものあり且
 朝廷上にて余從來人情之輕薄此等の患依て來るを推知す故に此度同志
 盡力必至誓て欲一掃此等の害を明より東上に決せり
 殿川一助も東京より歸り在于此又來て近情を語る山縣篤藏は于此余を
 待てり

(繼頭) 兵部省より番兵來て余を護す雖辭敢て不許

今日肥後大參事安場逸平大田黒岩太來訪余中山當知事來談中に付面
 會せず依て又訪其宿暫相語る當時肥後藩一致一定大に奉

朝旨天下之振興を欲助且此度廣澤の難を承知し大に

朝廷の衰絶を歎し誠心吐露實に可感之事不少

兵隊來て夜白我旅寓を護す

木戸孝九日記第一 (明治四年正月)

四百四十六

『木戸孝允日記』の復刻に際して

佛敎大学歴史学部教授 青山忠正

このたび、マツノ書店から『木戸孝允日記』全三巻が復刻される運びとなった。その底本は、日本史籍協会から昭和八年（一九三三）六月に刊行されたものだが、ごく少数数であった。その後、昭和六十年（一九八五）までに、東京大学出版会から復刻、さらに復刻再刊されたことがあるが、それらもすでに、古書市場でも入手しがたい状態になっていた。

書物は、それ自体が、一種の魔力を持つ文字媒体であると、私は考えている。つまり、いかに「技術が発達し、モニター画面に、ある書物を簡単に呼び出せるようになったとしても、画面上で無機的に並ぶ文字を追う」と、読書とは、別の行為である。読書は、書物の重みと感触を、自分の手に感じ取りながら、頁を繰り、傍線を引き、書き込みを繰り返して行なうものだ。それは、すなわち書物の筆者との対話であり、時には交歓ですらあり、理解と吸収の程度が格段に違ってくる。その意味で、いわゆるアナログ媒体に思える書物の刊行は、とくに、それを通じて歴史的な考察をめぐらそうとするとき、ゆるがせにできないものなのである。

さて、現在までに公開されている木戸日記は、明治元年（一八六八）四月一日から同四年二月三十日まで（第一）、明治四年三月一日から同七年二月二十八日まで（第二）、明治七年三月一日から同十年五月六日まで（第三）、の三巻である。わずかな例外を除き、ほぼ一日も途切れず、書き継がれている。その特徴を、以下では簡単に紹介してみよう。

第一には、何といつても、木戸が明治以降の新政府において、常に中核的な位置にあつたことである。その叙述は、ある日のみずからの活動や、そこでの会話の内容等において、実に詳細である。政治史の史料として、大きな価値を持つことは、改めて言うまでもない。

明治維新时期に活躍した人物の日記は、例えば大久保利通をはじめとして、決して少なくないが、木戸の場合は、その政治的位置の重さと、記事の詳細さにおいて、群を抜くといつてよい。また、そこに登場する人物は、明治元年当時から、あきれるほど多彩である。たとえば、鳥羽・伏見戦まで敵対していたはずの大垣藩の菱田海鳴をはじめとする他藩人や、讃岐金刀比羅の侠客、日柳燕石のように、市井の人物までを含む。木戸の政治力が、こうした豊富な人脈に支えられたものであつたことがうかがえる。

第二に、木戸は、その感情を、時として率直に、書き残していることである。元来、日記とは、公家日記に代表されるように、家としての公式行事や儀礼の次第を記録し、子孫に伝えるためのものであつた。江戸時代の中期以降になると、個人が日々の行動をみずから振り返り、将来の糧とする意味で、日記に「内省」という要素が加わり、備忘メモの域を超えるようになる。しかし、木戸のそれは、「内省」には違いないが、

ある出来事に関する憤懣や、人物評、はてはただの愚痴などを綿々と書き綴る。少し斜に構えた言い方になるが、木戸日記の面白さは、この点が一番かもしれない。

その一例をあげよう。明治四年正月九日、盟友広沢真臣が、東京の私邸で暗殺された。木戸は、その報を、帰郷中の山口から東京へ戻る途中の神戸で二十二日に聞いた。広沢の主張だつた「真成郡県」（廃藩置県）が、実現に向かいつつある頃だ。木戸は、旅行中も持ち歩いてきた広沢からの手紙を取り出し、永訣を思い、何度も読み返し、「流涕惨澹に絶えざるなり」と書き、さらに続ける。「王政一新の際、ただ広沢の一人、政府上に余を助くるものあり。今日の事を聴く。実に兄弟の難に逢うといえども、かくの如きの悼悟、如何と申す」。

振り返ってみれば、幕末以来、木戸の親しい知友は、久坂玄瑞、周布政之助、高杉晋作、坂本龍馬、大村益次郎と、政争の渦中で、次から次へと亡くなった。いたたまれぬ思いだつただろう。木戸が、京都東山の霊山に招魂社を設けようとしたことも、その思いと無関係であるはずがない。木戸の日記からは、そのような意味で、一人の政治活動家の内面をも具体的に、読み取ることができるのである。

さて第三には、少し専門家向けの解説になつてしまつが、木戸日記に關しては、それを補足してくれる関係史料が、実に豊富に存在することである。まず、木戸発書簡を中心に、木戸宛ての書簡をも収録した『木戸孝允文書』全八巻・補遺一卷（東京大学出版会、二〇〇三年復刻）がある。近年では、木戸宛ての書簡を集めた『木戸孝允関係文書』（東京大学出版会、全五巻予定、二〇〇五年以来、第四巻まで刊行済み）も刊行中である。さかのぼつては、『松菊木戸公伝』上下（明治書院、一九二七年）という浩瀚な伝記があり、その行動は、比較的容易に調べることができる。これらを突き合わせて参照することにより、木戸日記の内容は、他の日記の場合と比べても、事態の背景や登場人物との関係などを、詳細に追うことができる。正直に言えば、日記だけを見ても、背景までは理解できないことが、一般論として、しばしばあるものだが、木戸日記については、ほとんど最高レベルの利用環境が整っているのである。

なお補足すれば、宮内庁書陵部所蔵、木戸家文書所収の日記原本を閲覧することもできる。私もかつて、原本調査を行なつた経験がある。筆致も丁寧だが、保存状態も極めて良好である。そのためにも、まずは今回の復刻版で、一通り以上の内容を読みこむ必要がある。

以上の内容を持つ木戸日記が、これまでより、格段に容易に入手できることになった。マツノ書店の事業に快哉を送ると同時に、研究者は言うまでもなく、木戸に関心を持つ多くの方々にも広く推薦する次第である。